

中村素堂

気のながーいたちで、特別にいっぱつ式のことも考えず、常に偶然のなかで人生を切り替えてきたようだ。

支那事変とかいつているうちに、拡大してついには大東亜戦争などといひ出して、知人たちが時局の中で立ち働き、お役にたつ形をとって多忙になった。

私はごく若い時に、学資のかせきに暗算の訳文などをやって、中央官庁の微々たる小役人をしていた縁で、この時局の中で国の機密、秘密などの保持に関する仕事をうけ持たされ、かけ持ちにしていた東京市立の学校の教員もやめて国の危機の中でたち働いていた。

そのうちに飛行機は一機も国土の空に入れないと揚言していた軍の態勢などは軽く無視して、秘密も機密もあったもんではない。空中からの撮影、空爆であるようになってゆく。海の方も大勢は日に日に非、という状況となつてゆく。仕事の仕事だからこの状態は報道面でもどう扱つても、事実の一端は何となく判つていた。

まあ心ある人々の間では、戦うというよりは、これをどう收拾するかというが大問題であつたかと思う。あるひとつの中央官庁を公園地帯の地下鉄へ移すというのに、大臣が待った——をかけた、閣議が深夜にも行われている。

今考えても、あのころの政治担当者たちの苦しみはどんなものであつたらうと思う。しかし下つぱ小役人でも何となく勘でこれが判ると、言葉だけでも悪い「敗戦」の收拾などどんなことになるものか——まんじりともしないで、一晩考え明かした日もあつた。

この二つ型の小役人に仕上がっている私どもの、対決できる局面ではない。ひとつのヘマがどんな破綻となるかも知れない。未報のくせに責任などというわけではないが、敗戦の一年半前に免職を願ひ出て囁託に切り換えていただいた。

さて敗けてみると、勢い込んだものほど虚脱感も深い。日本人未曾有の総ボケのようになった。晒つていた人もあつたが、開關以來経験のない大破局だつたから、いたし方もないことだつたらう。

がっかりしているだけで仕方がない——焼土の故地に帰つて来た人々の小集会をやつて、みんな励まし合いをやつてみようとなつて小石川の浄土宗深光寺というお寺が進んで配給のパラックを会場に提供してくれたのを機に、禅書だの経書だのいい加減にまぜて、時の役に立ちそうな話をして四年あまりになった。ちょうどその中にいま勤めている大学の先生が来ておられて、十何年という教員歴のあることだから新設の講座を担当させられることになった。

教員という仕事はこつこつ型の人間にごく向いていて、かつてのように役人兼教員などと違つて、自分の最も好きなことだけに専心していられるので、魚に水、ここに二十三年も腰を据えてしまった。

だがこの教員も大好きなことだけに没頭してられないのが昨今のご時勢、むかしは日露戦争も知らなかつた——という学者もいたというが、今はそんなことはあり得ようもない。

驚くというところは一切捨てて、驚かない修行が出来ていない人に今の教員は勤まらない。まして明治生まれなどあつては当然のことである。一介の雲水にでもなつたつもりで何でもかんでも自分でやつて見せる式で、十分やつてみてから義務も責任も云々するといふ古い古い型式でちよつぱり新風を吹き込んだやり方で、この二、三年の学生あらしの中も何とか若い人たちが仲よく、むしろ日々慶快にやつてきた。

私の人生劇場もこの辺りで終了、いづれ地に就く日もあるうというので、たまには顧みる時もある。このような作文か題をいたしていくとハハアあの戦局末期から私は人生の曲が角をひとつ大きく曲つたのだと思う。と同時にこつこつ型向きの仕事に達著した仏縁を有り難いことだと合掌している。

〔筆聞雜記〕中村素堂筆集（昭和六十三年刊）より転載。

（昭和四十七年六月）